

猪14 猪買いと狩人 = = = 猪・鹿・狸より

撃った猪はその場で臓腑を抜くこともないではなかったが、いったん池や沢のほとりへ昇り出したのである。今でもはっきり目に残っているが、日の暮れにがやがや話し声を前触れにして、泥まみれになった狩人たちが、屋敷の奥の窪から出て来たことがある。なかには体の前半分が泥になって、びっこを引いたものもあった。その中に肢をしっかりと棒に結え



つけられて、倒さに吊るされた猪が、二人の狩人に昇がれていった。その傍らを犬が元気よく走っていた。一つの赤犬は、横腹が破れて腸が少しはみ出していた。そら猪が通るなどと言うて、われがちに駆け出して見たものである。



猪の臓腑を抜いて、猪買いの来るまで水に浸けて置く場所をシシフテ〔猪漬て〕と言うた。村の藪下と言う家が、代々狩人で、谷底の日もろくろく射さぬような屋敷であった。表の端に太い柿の木が幾株もあって、その下が沢になってシシフテがあった。自分が子供の頃はもう名称だけだったが、二方石垣で囲んだちょっとした淵で、蒼く澄んだ水の底に、鱗の紅くなったハヤが幾

つか泳いでいた。以前は日が暮れてから、松明を点して狩人ががやがややっていたものだという。もう五〇年も前であるが、大勢の狩人がいつものように臓腑を抜いていると、犬が向う岸にいてしきりに鼻を鳴らしていた。それを見た狩人の一人が、ほらと言って、臓腑の一片を投げてやると、いつの間に来ていたのか傍らの柿の枝に鷹がいて、あっという間にその一片を宙に攫って行ったことがあった。

その頃は冬になると、いつ行っても猪の二つや三つは漬けてあった。ある時村の某の狩人が、珍しい巨猪を撃って、臓腑抜き三五貫もあるのをそこに漬けて置いた。それを新城の町から来た猪買いが、えらいことをやったのうと言いながら、岸に踞んで、指頭で突っついていたそうである。そのうち後肢を掴んだと思ったら、片手でずるずるとわけもなく提げ出したには、見ていた狩人たちがいずれも魂消たと言うた。金槌と言う力士上がりの男で、江戸の本場所三段目まで取り上げた、力持ちで評判者であったそうだ。

その頃は、捕った猪はそのまま売ってしまって、肉を食ったり、狩人が切り売りするようなことはなかった。而して獲物のあった晩は、日待をやって、臓腑だけにて喰ったのである。喰う時にはやはり諏訪明神から迎えて来た箸を使った。前言うた、シシフテの傍の屋敷は、狩人たちがよく集まる場所だった。そこで日待をやって、臓腑を煮たのである。そんなわけからして、なにかと人出入りが多くて、いつ行っても一人や二人はきっと遊んでいたと言う。

狩人が猪の臓腑を抜く時、第一に目ざしたのは、その肝であった。シシノイと言うて、万病に霊能あると言うたのである。村でも物持ちと言われるほどの家では、必ず購って貯えてあった。狩人自身も持っていた。糸で結わえて陰乾しにしておいて、小刻みに刻んで売ったのである。しかし多くは肉と一緒に、猪買いの手に購われて行った。何処に需要があったか知らぬが、時とすると肉全部よりも一個の肝の方が高く売れたそうである。明治になって後でも、肝が一つ七五銭で、肝心の猪の骸は二五銭ぐらいにしかならぬこともあったと言う。

これは珍しいと言われるような大猪の胆であれば、物持ちへ持ち込んで、米の三俵や五俵に代えるのは訳はなかったと、狩人の一人は言うていた。今考えると、嘘のような話である。